左衞門春海が弟子、猪飼文次郎某に御尋ありしに、文次郎其わざにいたりふかゝらざれば、答へ奉る事あたはず、かさねて彦次郎賢弘にとはせ玉ひしに、彦次郎賢弘、京の銀工中根條右衞門玄圭といふを推擧せり、よりて條右衞門玄圭を府に召れ、御質問どもありしに、かれが申所ことごとく明白なりければ、大に御旨にかなひ、そのころ唐船に、曆算全書といへる書をもたらし來りしを、條右衞門玄圭に譯すべしと命ぜられしに、やがて譯本一通を進らせける、玄かるにこの書は、別に全書ありし其中より抄錄したるものなれば、其全書をみざらんには、本意は明辨しがたしと玄圭申しければ、やがて其全書をもち來るべきよし、長崎の奉行萩原伯耆守美雅もて唐商に命せらる、はたして曆算全書は、西洋曆經のうちより抄錄せしものなりしかば、西洋曆經の書本をもて參りぬ、これをも條右衞門玄圭にみることをゆるされしに、これにたよりて、律襲曆（一名白山屠）をつくりて奉れり、その頃條右衞門玄圭、凡曆術は唐土の法みな疎漏にして用ひがたく、明の時に、西洋の曆學はじめて唐土に入し後、明らかになりし事少からず、本邦には耶蘇宗を嚴しく禁じ玉ふにより、天主または李瑪竇などの文字ある書は、ことゞく長崎にて燒捨るおきてなれば、曆學のたよりとする書甚だ乏し、本邦の曆學を精微にいたらしめんとの御旨ならば、まづこの嚴禁をゆるべ玉ふべしと、建議せしといへり、

〔外交志稿二十四學術宗教〕是歲、〇正德六年建部賢弘ニ命ジテ、曆算全書ヲ校セシム、賢弘譯語ヲ撰ス、通航一覽

〔愛日樓文二〕亡友間大業碑銘叙〇中略

君諱重富、間氏號長涯、晩自號耕雲主人、大業其字、間氏之祖出於淡海蒲生氏、元和中、有遷津國西成郡鷺島莊者、寛永之初、來家浪速業典鋪、迨君凡六世、襲稱十一屋五郎兵衞、考諱重光、妣中野氏、有七男一女、君其第六子、兄弟皆夭、君嗣、君幼容止凝重、嶷如成人、年甫十二、見渾天圖反覆翫之、後數日手自採輪竹木造一儀器、不少差、人皆驚、頃十七八學算法、既弱冠始志星象之學、遍求古今曆書讀之、夙